

閲覧ニュース 112号

2013.4



索引そしてつまみ読み

小河原 誠

わたくしは、翻訳などを含めて20冊くらい本を出版してきた。だから、本を作る側の人間でもあったのだが、その間もっとも嫌なことは、出版社と交渉すること、ついで索引をつくることであった。前者については、いい思い出はあまりない。苦労話を聞かせてもらった方がありがたいという人もいるかもしれないが、わたくしとしては好んで語りたいことがらではない。

索引をつくることもまったく不毛な作業だった。いまでこそワードなどを利用できるが、それでも検索語とカタカナの読みを打ちこまなければならない。しかし、完全自動化は無理であろう。翻訳の場合を念頭において言うと、原文の単語に日本語単語が完全に対応するなどということはあるから。文脈に応じて読んで訳しわけているし、漢字ばかり続くところでは仮名に開くこともあるし、代名詞で受けている場合もあるからだ。人名などは単純だと思う人がいるかもしれないが、既存の訳文を引用せざるをえないばあい、表記が違っているのだから、困ってしまう。その他いろいろ苦労の種は多かった。

わたくしの場合、訳し終えた時点で、あるいは書き上げた時点で、精も根も尽き果てたわけで、さらに索引づくりをする気力など残っていなかった。やむをえず這いつくばってやった。編集者にやらせるなどというのは、むしろ、偉い先生の特例だと思う。アルバイトにやらせようとしたこともあるが、金がかかるし、早くやってくれるわけでもない。何千回と校正刷りのページめくりをするのは、

相当な忍耐力を必要とする。わたくしの経験では普通の本で、かかりきりでやっても4、5日はかかる。

索引づくりを不毛だと思うのは、どうしても、いったい誰が索引を利用するのだろうかと考えてしまうからだ。索引をありがたいと思う人がいったいどれくらいいるだろうか。もちろん、正確な索引が決定的に重要な分野もあるだろうが、小説の場合のようにおよそ索引をつけないところもある。わたくしが携わったのは、哲学の分野で、上記二つの中間領域のようなところだ。索引は、あるのが望ましいといった程度の領域であった。

わたくし自身は索引を利用したという経験はあまりない。わたくしは研究者の端くれとして、この本は全体としてなにを語ろうとしている書物なのか、矛盾したことを言っていないか、といった観点から読まざるをえなかった。索引を巧みに利用してつまみ読みするというわけにはいかなかった。このように書くと、いかにも正当な読書をしていたかのように響くかもしれないが、そうではない。いつも追われるようにして、研究のために論文を、本を読んでいたのであって、心の欲するままに、精神を豊かにするために読む余裕などほとんどなかった。とすると、ふつうに言う「つまみ読み」よりも、ただ規模の大きなつまみ読みをしていたにすぎなかったわけだ。わたくしは、本作りなどとはおさらばして、心穏やかに何の強制もないところで静かに本を読みたいと心から願っている。

(人文社会科学)

これも読書！？

高木 健太郎

小、中、高の時は国語の授業が大嫌いであったからかもしれませんが、小説等の本は夏休みの読書感想文（これがまた大嫌いであった）の課題本を嫌々苦し紛れに読むくらいで、それ以外は何も読みませんでした。（漫画は良く読み、しかも何度も読み返しましたが・・・）しかしその反動なのか大学へ入り国語の授業が無くなると、俄然小説が面白く、手当たり次第に読むようになりました。そしてすべての若者が多かれ少なかれ持つ“人生如何に生きるべきか？”の疑念に捉われるや、この問題を解決しなければ生きて行けないような気がして、論語、思想哲学書、聖書、仏教書・・・にこれまた手当たり次第に挑戦したのです。しかしこれらは小説を読むようにはいきませんでした。論語はまだ分かり易かったですが、生き方は書いてあってもその理由までは述べられていなかったように思われました。哲学書と聖書は“信”の部分がその根底にあるように思われて、数学を一步また一步と肯きながら理解していくのとはまったく次元を異にするように思われました。程なく挫折し、退散しました。残された道はひとつ、仏教でした。“分かつが分かるまいがこれで行くしかない！”と心を決めたのです。仏教学者の書いた解説書を読み、原始経典を読み、大乘起信論、維摩経、阿弥陀経・・・臨済録、

正法眼蔵、歎異抄・・・何も分らずに字面を追っているだけの毎日でありました。諸法無我、五蘊皆空、・・・、無位真人、有時、なむあみだぶつ・・・何だっ、これは！？何を思い浮かべたらイイのだ！？取っ掛かりも何も有りゃあしない！！でもこれしかない！！これで行くしかない！！しかし、そう決めたからかも知れませんが、哲学書や聖書とは違って仏教には何か肯くことの出来そうなものがあるような気がしたのでした。そしてそのころ、この決心を支え励ましてくれた言葉が、小学生だか中学生のときに、朝礼か何かで先生から聞いて頭に残っていた“読書百遍 意自ずから通ず（本来は、義自ずから見わる）”でありました。棒読みでもイイ！今は意味なんか解らなくてもイイ！いつの日か肯くことが出来るに違いない！とこの言葉を信じ読み進み、読み終わればまた最初に戻ってくり返し読むことの毎日でありました。こんな読み方が何年続いたのか？また肯くことの出来た日が来たのかどうか？これについては何も言いませんが、学校の勉強や仕事に縛られずに、何かを求めて自由に本を読むことが許された学生時代であったからこそ、こういう読み方が可能だったのだと思います。

（数学）

開館スケジュール

	開館時間
4月8日～7月末（前期試験終了）まで	平日 9：00～19：00 土曜 9：00～13：00
前期試験終了後～後期授業開始まで（9月初め）	平日 9：00～17：00 土曜 閉館
9月初め～年末まで	平日 9：00～19：00 土曜 9：00～13：00

休館日：日曜日、祝日、第2・4土曜日、本学記念日

そのほか、臨時閉館や開館時間の変更があるときは、その都度掲示でお知らせしますのでご注意ください。

アメリカ議会図書館

西村 月 満

子供の頃より、図書室・図書館の整然と本の並ぶ静かな空間に立つと、本との出会いに心がわくわく躍ります。遠い遠い狩猟民族の先祖の血が、本の森の中で騒ぐかのようなのです。そして、学生時代も教員時代も、図書館は私の強力なサポーターでした。

多くの図書館を利用してきましたが、2005年8月に研究資料収集のため訪れたアメリカ議会図書館ジェファソン・ビル（The Library of Congress, The Thomas Jefferson Building）は特別で、その美しさに息をのみました。建造物としての構造と空間の造形も、内部装飾の絵画彫刻も、アメリカにおいて真にmagnificent（壮麗な）と言えるものを初めて目にした、という思いでした。このジェファソン・ビルは、当時のアメリカの鉄鋼・石油業を中心とした経済的繁栄を背景に大量の大理石を用いるとともに、アメリカ中の名だたる芸術家を集めて1890年着工、1897年に完成しています。

入り口を入ってすぐのグレイト・ホール2階壁面には、人物をもって思想を表すという古代ギリシャ以来の西欧の伝統にならう寓意の人物画が数多くあり、どの人物も知性と温和さにあふれた表情をしており、議会図書館にふさわしい荘重さに満ちています。

主閲覧室に入ると、上を見上げれば黄金色のドームが輝き、その中央には「無知のベール」を頭から取り外そうとしているHuman Understandingと題された女性像が描かれています。その下ドームの天井を巡って、12の人物像が人類の文明の発展を示しており、各文明の業績が書き込まれています。「書き残された記録」を象徴するエジプトから始まるのも図書館との結びつきが感じられます。最新の文明はアメリカで、「Science」と書き込みがあります（表

紙写真右下）。このアメリカ像は図像学的には他の文明の像よりも複雑に感じられます。まず着衣は簡素な作業着のようなもので、額に汗して働く一般市民が文明を支えていることに対する敬意が感じられます。この人物はロダンの彫刻「考える人」と同じようなポーズで左手の上に顎を置き、横向きで思索にふけっている様子をしており、右手にはこのエンジニアが資料として読んでいた本が握られ、学術への取り組みを示唆しています。足元に置かれた発電機は、科学技術の分野でのアメリカの貢献を象徴しています。顔は若き日のリンカーンをモデルとしていると言われ、政治的にも道徳的にも模範とすべき人物像となっているのでしょう。

このドームの下には、閲覧用の机が同心円状にゆったりと3列並び、平和を象徴する円形がドームともども心地よい空間を作っています。かねて日本国内からインターネットを通じて蔵書検索をしておいた書籍の閲覧をこの主閲覧室の中央にあるカウンターに申請し、数時間後、日本国内の公的機関には所蔵がなかったため図書館相互貸借サービスでも手にするのでできなかった本と出会うことができたのは、大きな喜びでした。

皆さんもWashington, D.C.を訪問される機会がありましたら、是非このアメリカ議会図書館を見学・利用なさることをお勧めいたします。

表紙：アメリカ議会図書館ジェファソン・ビル主閲覧室ドーム中央フレスコ画 北里大学教養図書館所蔵 *The Most Beautiful Libraries in the World* (Photographs by Guillaume de Laubier, Text by Jacques Bosser) N.Y.: Harry N. Abrams, Inc., 2003より

(英語)

閲覧ニュース112号 2013.4 発行

発行責任者 高 津 昌 宏

北里大学教養図書館

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1

電話 (042) 778-8005